

東南アジア生態史

柳澤雅之

自然と人の相互作用を歴史的に解明しようとする研究分野を指す用語として、生態史(生態環境史、ecological history, eco-history)のほかに、環境史あるいは環境歴史学(environmental history)という分野がある。そうした分野ができていく過程で、研究対象とするのが、人間による環境の改変であったり、逆に、環境の変化が人間社会に及ぼす影響であったりした。しかし現在では、自然と人のかかわりを両者の相互作用のなかで歴史的に研究しようとする点においてほぼ共通しており、本章ではとくに区別せず生態史として記述する。

東南アジア研究のなかで生態史研究という分野が確立されているわけではない。そもそも、歴史家が生態史(この場合はenvironmental history)という用語を用いたのは、一九六〇年代後半から七〇年代にかけてのアメリカであった[McNeill 2003]。当初はアメリカの事例が主要な対象であったが、現在では、研究対象はヨーロッパやアフリカ、オーストラリア、南米、中国に広がった。そうした地域での研究蓄積に比べると、東南アジアを対象にした生態史研究は現在でも相対的に少ない。

ひるがえって、戦後日本の東南アジア研究を眺めてみると、自然科学研究が重要な位置を占めてきたことがわかる。なかでも、東南アジアを専門とする日本最初の研究機関である東南アジア研究センター(現東南アジア研究所)が一九六

三年、京都大学に設置されると、東南アジアを対象とした地域研究が進められ、自然科学研究がその重要な一角を占めた。同センターが、世界の他の東南アジア研究機関と異なる特徴として、自然科学者の割合が多いことや、同センターが発行する学術誌『東南アジア研究』の論文に占める自然科学系の論文数の割合が高いことはよく知られている。

日本の東南アジア研究にとって自然科学研究が重要な位置を占めるのと同時に、東南アジア史研究にとっても、自然科学研究は重要な位置を占めてきた。上述した東南アジア研究センターでも人文社会科学の研究者が多数在籍しており、自然科学出身の研究者と協働して学際的な研究を進めていた。そうした研究環境は、とくに自然科学の知見をおおいに利用し、歴史のなかに自然環境の役割を積極的に取り込もうとしたユニークな東南アジア史研究を構築することを促進した。生態史の課題が自然と人の相互作用を歴史的に解明することであるのならば、日本の東南アジア史研究は、独自の生態史研究を進めてきたといつてよいだろう。

本章の課題は、過去四〇年間の東南アジア生態史研究を概観することにある。なかでも、このユニークな日本の東南アジア生態史研究を中心に取り上げ、その源流、展開、多様化する研究の方向について概観する。

生態史関連研究の展開——一九六〇年代まで

自然と人のかかわりに関する研究の源流は、気候と政治の関係についての考察のように、ギリシア哲学にまでさかのぼることができる。その後、博物学をもとにした自然科学の発達や、十九世紀以降の地理学、二十世紀以降の人類学の発達とともに、自然と人のかかわりに関する研究は深化した。

日本では和辻哲郎の風土論がよく知られているように地理学の役割が大きく、あわせて民族学や農学、生物学の果たした役割が大きかった。そうした成果を踏まえながら、戦後日本の東南アジア史研究は進められた。

農学や生物学をベースにした自然と人のかかわりの研究のなかでもユニークだったのが、中尾佐助や上山春平、佐々

木高明らが提唱し議論を深めた照葉樹林文化論や農耕起源論であった〔上山一九六九、上山・佐々木・中尾一九七六、佐々木一九七〇、一九七一、中尾一九六六〕。葉に光沢があるクスノキやシイノキなどの常緑樹を照葉樹と呼び、これらの照葉樹が卓越するヒマラヤ中腹から東南アジア大陸部、中国・長江(揚子江)流域、西南日本にかけての地域にみられる共通の文化要素を抽出し、その文化複合を照葉樹林文化と呼んだ。共通の文化要素としては、焼畑農耕、水さらし法によるアケ抜き、ウルシの利用、味噌・納豆・なれずしのような発酵食品の利用、シルク生産などが含まれる。農学や生物学の知見を応用し、自然と人のかかりから文化論を展開したのである。

同じころ梅棹忠夫は、東アジアからヨーロッパにかけての広大な地域を対象に、文明の興亡と自然環境の関係をダイナミックに描き、独自の文明論を提唱した。そして、自然環境から文明史を考察する自らの見方を生態史観と呼んだ〔梅棹一九六七〕。

照葉樹林文化にしても生態史観にしても、自然環境の違いを地域の文化や文明の違いに結びつけて考察したものであり、当時から環境決定論にすぎるという批判がなされていた。しかし、農学や生物学をベースにした詳細な自然環境解に、民族学や社会学の知見を加え、創造力に満ちた文明論・文化論は日本独特の展開を遂げ、他の研究分野にまで影響を及ぼした。これらの成果は、残念ながら英語での成果発表が少なく、世界に知られる度合いは少ないものの、日本の東南アジア生態史研究の前史における大きな特徴といつてよい。

農学や生物学の知見を駆使した研究は七〇年代の東南アジア研究にも受け継がれ、例えば渡部忠世は、東南アジア各地に散在する寺院や遺跡のレンガの中に含まれる籾の形態から、稲の歴史的な伝播ルートを明らかにし、稲作の起源をインド・アッサムから中国・雲南にかけての地域だとする説を提唱した〔渡部一九七七〕。こうした研究は、のちの、東南アジア生態史論にも大きな影響を与えることになった。

海外の東南アジア生態史研究の前身

ヨーロッパでは、植民地時代から地理学や人類学の分野で自然と人のかかわりに関する研究が進んでいた。代表的なのは、地理学と歴史学の融合を試みていたフランスのアナール派と呼ばれるグループであり、地理学的な知見を歴史に取り込み、ダイナミックな歴史を描こうとしていた。地理学者ピエール・グルーは、ベトナムを中心として、植民地期インドシナ全域で地理学的な調査を行った後、南米やアフリカでも調査を行い、熱帯の自然環境と文明の関係について考察した。彼の熱帯観はアナール派の歴史家たちに大きな影響を与えた。影響を受けた一人が、フェルナン・ブローデルである。

ブローデルによって執筆された『地中海』や『物質文明・経済・資本主義 十五〜十八世紀』は自然環境の役割を長期の歴史の変動のなかに位置づけなおす研究として歴史界に大きなインパクトを与えた『ブローデル二〇〇四』。『地中海』のなかでブローデルは、歴史の時間軸を長期・中期・短期に分ける。長期の時間軸では「ほとんど動かない歴史」すなわち「人間を取り囲む環境と人間との関係の歴史」を取り扱う。中期の時間軸では、このほとんど動かない歴史の上に見れる「(社会の)歴史(社会史)」を扱う。短期の時間軸では、これまでの歴史記述が中心においてきた「出来事の歴史」を扱う。別の言い方をすれば、「歴史の時間のなかに、地理的な時間、社会的な時間、個人の時間を区別」したという。そして、従来の歴史の記述の仕方のように、たんなる歴史的背景として自然環境条件を説明するのではなく、歴史を構造的に理解するために必要なもつとも基盤となる条件として自然環境を位置づけたのである。ブローデルが長期の時間軸で説明しているのは、「ゆっくりと流れ、ゆっくりと変化し、しばしば回帰が繰り返され、絶えず循環しているような歴史」である。そして『地中海』では、この点がそれまでの歴史記述とは大きく異なっているのだが、長期の時間軸をまず説明し、ついで、中期・短期の歴史を説明した。すなわち、自然環境の役割を、歴史に影響するもつとも基盤的な要因として説明したのである。

アナール派自身は、自分たちの研究を生態史(environmental history)としては呼んでいな³ [McNeill 2003]。しかし、ブローデルの成果は、後述するように東南アジア史の研究者にも影響を与え、のちに *Southeast Asia in the Age of Commerce 1450-1680, Volume One: The Lands below the Winds* が書かれる大きなきっかけとなった[リード一九九七]。

東南アジア生態史研究の前史として、アメリカでは人類学の貢献が大きかった。一九〇〇年代前半にはすでにエバンズ・プリチャードのような人類の生態学的な研究を行う研究者が存在していたが、その後、一九六〇年代になって、生態人類学という用語が用いられるようになった。そのなかでスチュワードは、文化がどの程度、自然の要因に影響されるのかを検討するために、文化生態学という概念を提唱した「スチュワード一九七九」。

日本で照葉樹林文化論が展開したのとはほぼ同じか少し前の時期、スチュワードの概念を批判的に検討したうえで、自然環境と社会経済制度の関係を歴史的にとらえようとする研究がインドネシアを舞台に行われていた。のちに農業インヴォリューション(agricultural revolution)として大きな議論を巻き起こすことになったこの研究は、若きクリフォード・ギアツによって行われた「ギアツ二〇〇二」。水田耕作が中心のジャワを含む内インドネシアと、焼畑が中心の外インドネシアという自然環境の違いのうえに、強制栽培制度によってもたらされたサトウキビとコーヒーという商品作物の導入がインドネシアの二重経済構造をつくった。その過程で、水田とサトウキビを組み合わせたジャワの農業が資本集約的・労働集約的な生産の場となり、技術的にも制度的にも内向きに精緻化する方向に向かったという。ギアツはこれをインヴォリューションと呼んだ。

ギアツの議論はそれ自身、自然環境と社会経済制度との融合を試みた意欲的な議論であった。また、農業インヴォリューションをめぐる、その後さまざまな批判と賞賛、論争が巻き起こり、結果として、自然環境を社会経済制度と密接にリンクさせるジャワの社会経済史研究が進んだ。その意味においてギアツの議論は、生態史研究とは離れているかもしれないが、自然環境を社会や文化のなかに歴史的に位置づけようとした研究として特筆すべき成果である。なお、

ギアツの議論をめぐる批判および論争の展開に関するレビューは、加納「二九七九、一九八四」に詳しい。

東南アジア生態史論の萌芽——一九七〇年代

東南アジアの歴史における自然環境の役割に関する試論が、一九七〇年代から日本で提出されるようになった。その最初の試みが、石井米雄による『タイ国——ひとつの稲作社会』である〔石井編一九七五〕。当時、京都大学東南アジア研究センターに所属していた石井は、同僚の自然科学者の強い影響を受け、水稻耕作という農業生産の形態が、自然環境によってどのような影響を受けるのか、それが、水稻農業を生産の基盤として成立したタイという国家の形態をどのように規定するのかという問題を、自然科学者の助言を得ながら考えていたという〔石井二〇〇四〕。その成果が農学的適応と工学的適応という概念である。

河川の上流部に位置する山間盆地に成立する社会では、谷間の溪流を利用した灌漑が行われ、導水路や井堰の建設が行われた。自然条件を土木工事によって人為的に改変し農業生産環境を整えることを石井は「工学的適応」と呼んだ。

一方、河川の下流部に位置するデルタ地帯は、雨季には湛水するが、乾季にはカラカラに乾燥する。とくに上流部から下流部への接続点、すなわち山地部の急傾斜から低平なデルタの緩傾斜に接続するあたりは勾配が緩やかになり河川の水が一時的に滞留する。デルタのなかではこのあたりで雨季の湛水深がもつとも深くなり、数メートルに及ぶ。そうした条件下では、前近代における技術や資本を用いて自然環境を人為的に改造することはきわめて困難であった。そのため、稲の作付け時期を調整し、洪水位が高くなる前に植えつけ、水が引いた後に収穫する浮稲が導入された。先の工学的適応に対し、自然環境の変化にあわせて水稻の生理的なメカニズムを利用する後者の方法を石井は「農学的適応」と呼んだ。そして、タイの国家形成史を、前者による「古代核心域」と、後者による「中世的貿易国家」に分けて論じた。

その後、この概念は他の地域のデルタ開拓史や社会経済史の研究にもさまざまな形で援用された〔桜井一九七九、一九八〇 a・b、一九八七〕。

しかし田中耕司は、稲作発展の過程を技術史的にたどろうとする場合には、「農学的適応」と「工学的適応」の二つの用語をそのまま用いると概念が多岐にわたりすぎるため、「立地適応型技術」と「立地形成型技術」という用語を提唱した〔田中一九八八〕。石井の用語では、農学的適応から工学的適応への歴史的発展段階が前提にあり、また山間盆地とデルタという大きな空間分布の間で技術的な違いがみられるという誤解を与える恐れのあることをその理由としてあげている。実際の稲作技術はもっとミクロなレベルで自然環境への適応の形が決められており、両者は性格が異なり、時間的にも空間的にも並存可能である。そして田中は、稲作を例にして、「所与の環境を改変することなく、むしろその環境が与えてくれる条件をそのまま積極的に利用して稲を栽培しようとする技術」を立地適応型技術、「環境へ積極的に働きかけて新たな稲の栽培立地を形成しようとする技術」を立地形成型技術と呼び、水田稲作における自然環境・技術・社会の関係について論じた。

東南アジア生態史論の展開——一九八〇年代

東南アジアにおける自然と人のかかわりに関する研究は一九八〇年代になって大きな飛躍を遂げた。

日本では、高谷好一があいついで成果を発表した。

『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』では、東南アジア大陸部にあるタイのチャオプラヤ・デルタを対象として、地形と稲作をベースに地域を区分（農業景觀区分）し、地形・土壌・水条件・植生・水利工事・稲作によるデルタの模式図を作成したうえで、デルタ開拓史について論じた〔高谷一九八二〕。

『マングローブに生きる——熱帯多雨林の生態史』では、東南アジア島嶼部に焦点をあて、湿潤熱帯環境下にあり、

大陸部に比べ樹木が卓越するこの地域を木の世界と呼び、自然環境の特徴やそこで暮らす人々の生活、そして自然環境と歴史の関係について論じた後、この地域における固有の論理についての考察を加えている〔高谷一九八八〕。

さらに、時期は前後するが、『東南アジアの自然と土地利用』では、東南アジア全体の自然環境条件を概観した後、東南アジア全体を九つの生態・土地利用区に分けた〔高谷一九八五〕。それらの区分は歴史的産物であるとし、現在の土地利用を理解するために、五つの時代に区分して土地利用史を論じた。

これらの成果はいずれも、自然環境と人の暮らし(生業)、および歴史を総合的に理解する最初の試みであった。かつての照葉樹林文化論や生態史観の方法論のような農学や生物学の知見の統合に加えて、地形や歴史、生業など、対象とする地域をさらに総合的に理解しようと試みている。現場を見て歩くことによって、生業を規定するローカルな自然環境の特徴を高谷独特の視点から抽出し、自然と人のかかわりの結果として現れる生業とそこに展開した地域の歴史をあわせて理解しようとした。

ローカルな自然環境の特徴の抽出にあたって、それまでの研究に比べてもっとも斬新な点は、地形分類の重要性を示したことであろう。とくに水稲生産にとっての地形分類の重要性は決定的であった。それは、たんに自然を理解するための地形分類ではなく、人々の暮らしを理解するための地形分類であった。その意味において高谷の地形分類は、地域に対する新しい見方の提示であった。現在では衛星画像の利用が普及し、高谷の地形分類よりも詳しい地形分類は可能である。しかし、衛星画像の利用や解析技術の向上は、地形分類を精緻にすることは可能であっても、見方を変えることはそれ自身にはできない。高谷の地形分類の新しいさは、東南アジアの地形の新しい見方を提示したことにあった。

東南アジアの自然環境と人の暮らしを理解するときに地形が重要であった背景に、東南アジアには豊富な水が存在したことを無視することはできない。福井捷朗は、東南アジアから東アジアにかけての地域を「アジア稲作圏」と呼び、この地域が「アルプス造山帯と温暖多雨気候とが重なるところに立地する」ことを示し、世界の自然環境のなかでアジ

アの稲作立地条件を位置づけた「福井一九八七」。畑作が卓越する地域と異なり、水稻が卓越する東南アジア（から東アジアにかけて）は、地形と豊富な降水が人々の暮らしを規定する重要な要因だったのである。福井の論考では、水稻が卓越する東南アジアから自然と農業（稲作）の空間的な分布と多様性の考察に加えて、両者の歴史的变化についても、先述した農学的適応と工学的適応をふまえた議論を展開しており、自然と人のかかわりについての論考としても興味深い。

さらに福井は、地理学者ピエール・グルーの熱帯観を批判的に検討しつつ、東南アジアの稲作をめぐる自然環境と文明の関係について論じている「福井一九九〇」。一九八〇年代の東南アジア生態史論の展開において福井は、とくに稲作を取り上げ、地形や気象、土壌などの自然環境条件だけでなく食糧生産や人口、技術などの要因も加えて考察し、世界のなかでの東南アジアの位置づけや熱帯と文明の関係について、他地域との比較の視点を含めた議論を展開している。

東南アジア生態史論の展開における高谷のもう一つの重要な貢献は、自然科学研究と歴史学の融合にあった。これは、東南アジア研究センターの同僚であった歴史学者の石井米雄や桜井由躬雄との共同作業の結果であった。先に紹介した高谷の業績のなかに、自然環境からみた東南アジアの歴史についての記述があるが、いずれも、石井・桜井との議論のなかから生まれたことが記されており、高谷・桜井ともそれぞれに生態史に関連する試論を展開している。

とりわけ桜井は、もともと専門とするベトナム歴史研究においても、歴史文献に加えて地形や水文環境から分析した論文を多数発表している。とくにホン川（紅河）デルタの開拓史研究がその代表である。それらに加えて、東南アジア全体の歴史を自然環境から見直す試論を公表している「石井・桜井一九八五、桜井一九九四ほか」。

桜井によれば、東南アジアの生態的枠組みはつぎのようである。「紀元前後から、十〜十一世紀までの、東南アジア世界の歴史圏はまず、単一の生態圏、つまり熱帯多雨林のなかの平原と海、山と海の結合として形成される。十〜十一世紀から、連続性をもって形成されてきた河川、海峡、海区を横軸としての複数の生態圏の政治的な統合が生まれる。このなかから十五世紀に始まる商業の時代に、ムラユ、ジャワ、ビルマ、タイ、ベトナムとそれぞれの歴史圏が形成さ

れる。各歴史圏のあいだを海の国際商人が走りまわり、共通した市場価値で結びつける」。これが、近世までの東南アジアの生態的枠組みであり、これ以降、植民地時代に入ると、人工的・政治的境界概念が強制されるようになり、生態的な枠組みとは別の論理で枠組み(圏)が形成されたとする。

一方、高谷は、東南アジアの二〇〇〇年の生態史を、森林景観の変化を指標として、二次林の出現期(十三世紀まで)、谷底の開発(十四～十九世紀前半)、近代空間の創出(十九世紀後半以降)の三つの時代に区切っている[高谷一九九二]。二次林の出現期には、大陸部の平原とジャワ島がそれまでの深い森から二次林に変化した。谷底の開発の時期には、農産物の産出が高燥地から低湿地へと転換した。海でもイスラーム商人が出現し、海域の高度利用が実現した。近代空間の創出の時期には、デルタの開田、ゴム園の拡張、熱帯低湿地林の開拓が進み、いわゆる近代空間の創出が行われた。

高谷と桜井による最初の東南アジア生態史論は、両者の議論の結果であることを反映し、高谷の『東南アジアの自然と土地利用』も、石井・桜井の『東南アジア世界の形成』も、いずれも一九八五年に出版されている。しかし、いずれも、そもそも生態史を明らかにするための研究ではなく、あくまで東南アジア史の全体を理解するための一環としてなされたものであった。したがって、その後、両者によって、東南アジア生態史論の全体像を修正したり、個別の事象を検討したりするような研究は進まなかった。先に紹介した生態史の時代区分も、両者の間で異なっている。その後高谷は、東南アジアでの地域区分を発展させ、世界単位論へと進んだ[高谷一九九三]。桜井は学際的な総合的村落調査へと関心を広げた。東南アジアを対象とした生態史関連研究は一九九〇年代になり、国内外を問わず、さまざまな方向で進められることになった。

江南デルタを対象にした自然科学と歴史学の融合

東南アジアを対象とした生態史論の展開を中心に述べてきたが、東南アジア研究に影響を与えたこの時期の自然と人

のかかわりに関する研究という点では、中国江南デルタを対象にした学際的研究をはずすことができない「渡部・桜井編一九八四」。これは、東南アジア研究センターを中心とする自然科学系の研究者と、膨大な史料を駆使して展開してきた伝統あるわが国の東洋学者とが、シンポジウムを開催し、中国江南デルタの理解をめぐって同じテーブルで議論を重ねたのである。その成果は、『中国江南の稲作文化——その学際的研究』としてまとめられた。本シンポジウムが大きなインパクトをもったのは、史資料に現れるテキストがもつイメージと実際の作業との間に非常に大きなギャップのあることが実感されたからであった。このことは現在にも通じ、史資料に依存して東南アジア史を研究する場合に十分注意する必要があることを大きな教訓として残した。

リードによる研究

ブローデルの歴史観に大きな影響を受けた研究者が東南アジア史研究においても現れた。アンソニー・リードである。リードは『大航海時代の東南アジア I 貿易風の下で』において、ブローデルの影響が多であったことをはっきりと述べている「リード一九九七」。リードによれば、地理学関連分野の知見を取り入れることで、ブローデルは「広い地域の「関連しあつた関係」と、その見事な多様性の両方を見せてくれた」とする。そして、ブローデルのアプローチが東南アジアでも有効な理由としてリードは、東南アジアは地中海に比べて統一性があること、東南アジアに関する文化人類学や東洋学、考古学などの豊富な資料を利用できる点をあげている。

リードが対象とする時期は、オランダの商業的ヘゲモニーが確立される前の一四〇〇年から一六五〇年の二五〇年間であった。人々の衣食住に直結する物質的な豊かさ、それをもとにした文化についての記述が、第二章および第三章に配置されている。

リードによる自然と人のかかわりについての記述は、従来の東南アジア史研究に比べて確かに斬新であった。事件史、

人物史、国家形成史などとして描かれてきた過去の歴史書ではけっして扱われることのなかった、ローカルに暮らす多様な人びとの暮らしが、可能な限り歴史的な経緯とともに鮮明に描かれており、そうした人々によって東南アジアの歴史が構成されていることを改めて気づかせてくれる。

この本では、リード自身によって東南アジアの自然の理解や、自然と人のかかわりについて整理されたアイデアが示されているわけではない。しかし、『大航海時代の東南アジア I 貿易風の下で』で示された、生き生きとした人々の暮らしに関する情報をより広域かつ通時的に収集することができれば、東南アジア生態史の再構築にとっても有効であると考えられる。というのは、リードの収集した資料により、当時の自然環境を知り、自然を利用して暮らす人々のことを知ることができ、そうした情報の蓄積によって、これまでとは異なる生態史を描ける可能性が存在するからである。実際、近年の東南アジア生態史研究では、リードの知見が多数、引用されている[Boongaard 2007]。

多様な生態史研究の展開——一九八〇年代以降

前項でみたように、一九八〇年代は東南アジア生態史論が展開した時代であったが、同時に、生態史研究が多様化した時代でもあった。もともと東南アジアの人たちは豊富な自然資源をさまざまに利用していた。研究が、ようやく実態に追いついたのである。東南アジアの生態史関連研究は一九八〇年代以降、急速に多様化する。

高谷と同様に、自然環境から地域社会のモデルを構築したのが古川久雄であった。インドネシア・スマトラ島やボルネオ島の沿岸低湿地帯の形成史と開発史に関する研究は、自然環境の成り立ちから開拓までを詳細かつ包括的に扱っている[古川一九九二]。

また、古川を中心とする東南アジア研究センターの自然科学系の教員が編集委員となって編集した『事典東南アジア——風土・生態・環境』は、東南アジア研究における自然科学系の研究成果の集大成であるといっても過言ではない

〔京都大学東南アジア研究センター編一九九七〕。基盤としての自然環境、自然を利用したさまざまな生業形態、生業を支える社会制度、およびそれらの歴史の変遷に焦点をあてた大部の事典である。しかも、事典ではあるが、一つ一つの項目は見開き二ページにわたって記載されており、それぞれの項目についての論考としても読むことができるユニークな構成をとっている。

稲作技術論・系譜論も活発な研究分野である。技術論としては、田中や古川が、東南アジア周辺域を含めた広域のなかで東南アジアの稲作技術の系譜と農耕文化について論じている〔田中一九九二、古川一九九二〕。

渡部らによって進められていた稲の伝播に関する研究も、植物遺伝学の進展とともに大きな展開をみた研究分野である。渡部によって提唱されていた稲作のアッサム・雲南説にかわって、佐藤洋一郎は、稲のDNA分析や新たな考古学の知見から、ジャボニカ長江起源説を提唱した〔佐藤一九九六〕。

福井は、タイ東北部の一村の詳細なデータをもとに、不安定な降雨条件下にある村の過去一世紀にわたる人口・食糧バランスを明らかにし、自然環境と社会制度、そしてそれらをつなぐものとしての生業や人口について総合的に検討を加えた〔福井一九八八〕。

自然環境と生業をつなぐ媒体としての技術論もさかんである。クリスチャン・ダニエルスは、中国・雲南の山地部における生業と技術について歴史的な考察を加えている〔ダニエルス、渡部編一九九四、ダニエルス二〇〇一〕。

大木昌はジャワ社会経済史で多数の論文を発表しているが、生態史的な観点を持った研究も多い。ジャワの水田水稻作や焼畑、森林環境と人の暮らしに関する論考がある〔大木一九八九ほか〕。また、病と癒しに関する研究も生態史的な観点が含まれている〔大木一九九六〕。

鶴見良行や村井吉敬は、ナマコ・フカヒレ・エビなどの海産物やバナナなどの自然資源を取り上げ、モノをめぐる資源の利用、交易ネットワーク、日本との関係などについて考察し、独自の分野を開拓した。これらの研究も重要な生態

史関連の研究である「鶴見一九八二、一九九〇、村井一九八八」。

考古学における研究蓄積も生態史と関連が深い。考古学はその性格上、自然と人のかかわりについての研究を積極的に取り入れる分野である。考古学が対象とする時代には文書史料がほとんど存在しないこと、また、制度や技術が未発達な時代では人々の暮らしが自然環境に大きく依存しており、自然と人のかかわりの解明は考古学分野の重要な研究テーマだからである。ただし本書では考古学については別に一章があてられており、研究史についてはそちらを参照されたい。

近年の生態史研究の成果——一九九〇年代後半以降

一九九〇年代後半以降、生態史を冠する研究が日本でも増えるようになった。組織としては、総合地球環境学研究所が二〇〇一年に設立され、地球環境学に関する研究をプロジェクト方式で進めている。地球環境学の研究では、人間と環境との相互作用環の解明を、地域に着目して取り組む姿勢を堅持したいという「秋道二〇〇八」。そのなかで秋道智彌がリーダーを務める研究『アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究 一九四五―二〇〇五』が二〇〇三年～〇七年にかけて行われた。東南アジア大陸部のメコン川集水域を対象に過去五〇～六〇年間の生態史を明らかにしようとするものであった。その成果が二〇〇八年の東南アジア学会春季大会のパネル『東南アジア生態史の構築に向けて』で発表されたほか、成果の集大成として三冊の論集が出版された「河野責任編集・秋道(監修)二〇〇八、ダニエルス(責任編集)・秋道(監修)二〇〇八、秋道(責任編集)・監修二〇〇八」。歴史・文化・生態にまたがる学際的研究の大きな成果である。

一方、世界の東南アジア生態史研究も九〇年代後半以降、進展した[Boomgaard 2007, Boomgaard, Colombijn and Henley (eds.) 1997, Henley 2005 ほか]。これらはいずれも、日本で高谷や桜井が試みたような、自然環境から見た東南アジア史の

全体像を提示するものではない。自然と人のかかわりについての具体的な事例をもとに生態史を論じている。かつてエニークな展開を示してきた日本の東南アジア生態史研究も、今後は、こうした海外の成果も取り入れつつ深化すると思われる。

生態史研究の意義と展望

自然環境の理解や具体的な生業活動に関する研究が歴史研究にもつ意味として、一般的に、史料のない時代の歴史の再構成に有用であることや、史料で復元された歴史に具体的なイメージを付与するといった点をあげることができる。豊かな自然環境があり、それと密接に関連する農林水産漁業に従事する人が東南アジアには多数暮らしている。都市化が進んできたとはいえ、東南アジア理解にとって自然環境の理解は現在でも重要であることに変わりはない。

しかし、これだけの役割では、自然環境や生業活動の研究は歴史研究にとって補助的な分野にすぎない。この点、ブローデルが、歴史における自然環境の役割を強調し、長期的に変化する歴史の基盤的な条件であったとした意義は大きい。

では、自然環境が、どの程度、歴史を規定する基盤的な要因であるといえるのかと問われれば、答えは必ずしも明確ではない。

歴史の変化を知るためには、理論的に考えれば、個別の事象の初期段階の状態を知り、その上にどのような要因によって変化が引き起こされたのかを知り、さらにその後、新たな状態のもと、新しい要因によってさらなる変化が起きるプロセスを知る必要がある。個別の事象ごとに現れる変化のパターンから、変化の普遍性や法則性を見出そうとする。わずかな初期段階の状態の違いによって結果が大きく変わるだけでなく、変化にかかわる要因がある一定以上複雑になると、それまでとは不連続な変化が引き起こされることも、二十世紀後半に発達した非線形科学の理論を持ち出すまで

もなく、歴史家には経験的にわかっていたことだろう。

東南アジア史のなかで自然環境の役割を理解することとは、第一に、高谷や桜井が試みたような、歴史の初期段階の状態を知り長期的に変化する基盤的な条件を知ることであった。ただし、自然環境が基盤的な要因だというときの「基盤」とは、その自然環境下ではすべての変化が同一方向になることを示しているわけではない。長期的な変化あるいは変化の大きな枠組みに影響するという意味である。

そして第二は、歴史の変化のなかにおける自然環境の役割を見直すことであった。一九八〇年代以降に進展した多様な生態史研究は、おもに歴史のなかの自然環境の役割を、ミクロな地域の自然と人の関係から考えることであった。リードの自然環境に関する記述は、名目的には第一で述べた基盤としての自然環境と人のかかわりについて述べたものと思われるが、実際には、時代ごとのその地域における社会経済的条件下での自然と人のかかわりについての記述である。その意味において、リードの自然環境に関する記述は、実質的には第二の歴史のなかにおける自然環境の役割の見直しにつながるものである。リードが集めたような情報をより広域かつ長期にわたって収集することで、東南アジアの人々の目線で過去の自然環境を理解することができようであろう。われわれが体験する現在の東南アジアに、過去の知見を加えることで、東南アジア生態史の新しい像を構築することが期待できる。

このような生態史研究が進展することにより、人物史や出来事史のような短期的な歴史ではなく、中長期的なタイムスパンで歴史のダイナミズムを考えることができる。このことは、環境問題や開発問題、災害対策のような未来を構想する必要のある課題が山積みされている現在、ますます必要な研究分野であるといえる。歴史研究は本来、未来を構想することに有用であるはずだが、その必要性がますます高まっている。生態史研究は、その一助となるであろう。